

手紙の印象

大村伸一

その一

十一月十六日

拝啓 右足崎 崩様

初めてお手紙を差し上げます。私、牛床 欠と申します。

突然のお手紙にどれほど驚かされているか、想像するたびに申し訳なく思います。

しかしこの手紙は、私にとって重要なものであると同時に、右足崎様にとっても緊急にして最重要の用件であることはお約束いたします。

確かに、見も知らぬ牛床などという名前の者からの手紙を読まなくてはならない義務など、右足崎様にはありません。しかも、この牛床という名前は、ご察しの通り偽名であります。偽名を使う者からの手紙であれば、さらにそれを読む理由などないでしょう。しかし、私には偽名を使わなくてはならない正当な理由も存在するのです。

とはいえ、もう便箋も尽きてしまいました。準備不足であったことはお詫びいたしますが、詳細は次回にお話ししたいと思います。

お返事お待ちしております。

牛床 欠

十一月十八日

拝啓 右足崎様

お返事がいただけなくて非常に残念に思っています。

やはり偽名であることが、お疑いを招いているのでしょうか。それでも、この手紙の重要性を是非ご認識いただいて、お返事をいただけることを願っております。

と、ここまで書いて気がつきました。

失礼とは思いましたが、右足崎崩様というお名前も偽名にさせていただいている非礼、お許しください。それを語らずに、お返事だけを乞うというのは、非常識だったことをお詫び申し上げます。

右足崎様と偽名でお呼びしているのには訳があります。

私の名前、牛床が偽名であることは前回申し述べましたが、そのように偽名を使うことに決めた次の瞬間に気づいたのです。自分だけ偽名を使ったのでは右足崎様に失礼なのではないかと。

自分だけ仮面をつけ、あなた様には素顔のまま話し合うという場面を想像したとき、思わず私は赤面してしまいました。それがどれほど失礼なことなのか、自分がどれほど迂闊だったかと思い知ったからです。

それで、右足崎様という偽名によって、お呼びさせていただくことに決めたのです。

勿論、見知らぬ者から自分の名前でない名前で呼びかけられた時、それが他でもない自分に対する呼びかけだと気づくことは困難です。おそらくそれ故に、自分に求められているとは思えない、あの手紙へのお返事を、右足崎様がお書きになろうなどと思われまいであろうことに、ようやく思い至ったわけなのです。なんという迂闊でありましょうか。重ね返すも申し訳ありませんでした。

かくのごとき事情ですので、あらゆる疑念を打ち捨てて、お迷い無くお返事をいただければ幸いです。

不運にも、残り時間は限られています。是非是非、早急にお返事をいただけるようお願いいたします。

牛床 欠

十一月二十日

拝啓 右足崎様

お詫びが足りなかったのでしょうか。今日の午後になっても右足崎様からのお返事は届かないままです。

これではあの重大な事件が発生し、右足崎様にも、不詳私牛床にも、致命的な損害が及ぼされるであろうことは、次第に確実になりつつあります。私はともかく、右足崎様の不都合を取り除くため、私は右足崎様からの返信を心より願うものであります。切望であり熟望であり熟望という言葉があるのなら正に熟望するものであります。

とはいえ、ここまで書いて気づいたのですが、右足崎様もよくご存知のように、私の手紙を封じた封筒には差出人の住所が書かれていませんでした。それでは右足崎様がお返事をお書きいただいたとしても、私の手許に届く事など未来永劫ありえないのではないのでしょうか。またしても私の迂闊が招いた事態であります。申し訳ありません。

勿論、右足崎様を非難しているわけではありません。そんなことがあるわけがないのです。もしもそれが原因であれば、お返事をいただけなかったことの非はすべて私にあるのですから。

それでもなお弁解させていただきたい。これだけは理解していただきたいのです。つまり、私が偽名を用いていることはご記憶されていると思います。やむにやまれぬ理由により、私は偽名を用いております。やむにやまれぬ理由については、まだお話しする機会を持っていませんが、偽名を使うということの背景にある匿名性の保証という観点において、私は私自身の住所をお知らせできない立場にいるのです。自分の住所を明かすということは、私自身を無力とし、私が回避しようとしている右足崎様の悲劇に抵抗するあらゆる努力を水泡に帰してしまうのだと、ご理解ください。住所をお知らせできない事、是非、この点をご理解ください。

おそらくご返事をいただけない理由はこれ以外にもあるのでしょう。誰か悪意のある者によって、返事を書くことを禁じられているとか、手紙が書けないように拘束されているとか、あるいはそもそも返事を書くための筆記用具が手の届かない場所に隠され、右足崎様は手紙を書くことがとうてい不可能であるとか、あるいはその悪意あるものによって監禁されているとか、さらにはその者の名状しがたい暴力によって、右足崎様の手足はすでに破壊あるいは切断されてしまっているとか、このような想像を重ねるにつれ、私は恐怖で身体の震えが止まらなくなるのであります。

このような不吉な想像が現実ではないことを切に望みます。

あついにまたもや便箋が尽きてしまいました。十分に用意していた便箋も、このように複雑な自体を書き記すには予想以上にあるいは予想以下に少なかったようです。これから便箋を買いに隣町まで行かなくてはなりません。隣町は遠方にありますので、次に差し上げるお手紙は少し遅くなるかもしれません。それでも、事態は緊急を要してきています。全力を投じて早急にご連絡さし上げる事をお約束します。それまでしばらくお待ちください。勿論、私の次の便がお手元に届くより前に、お返事をいただければそれに勝るよろこびはありません。

牛床

十一月二十五日

背景 右足崎様

このように執拗なまでに返信をいただけない現状を分析し、私は結論を得ました。それは仮説というにはあまりにも真実に近いものだと私は確信しております。

すなわち、右足崎様は監禁されているのだと確信しております。肉体に加えられた危害についてはつまびらかではありませんが、この手紙を読むことも困難であるのだという可能性を、私は除外できません。

それでも私にできる事は、少しずつ情報をお伝えし、右足崎様と私牛床の双方が最善の行動を取り、事態を解決できるようにすることだと理解しております。

右足崎様を監禁している者が何者であるのかは分かりませんが、彼等が私に敵対する者であることは明らかなようです。そして、私のこの手紙を盗み読んでいることも疑いのないところでしょう。どうだ、凶星だろう。この文は盗み読んでいる者へのメッセージです。決して右足崎様へ向けたものではありません。

今、「彼等」と書いたことにお気づきでしょうか。私の分析では、誘拐や監禁をする者は決して一人ではあり得ません。暴力を行使する時、被害者よりも数において圧倒的に優位に立つ必要があるからです。どうだ、凶星だろう。右足崎様にはご推察の通り、この文は監禁者に対するものです。誤解されませんようにお願いします。

盗み読みをする敵対者の存在は、私が差出人の住所を書くことに潜在する危険と考えていることの一つです。危惧が現実となり始めている今、私はやはり差出人住所をお知らせする危険を犯すことができません。それゆえ、私の住所はお知らせしないまま、お返事をいただく方法を考案いたしました。もしも、可能であれば次のような方法でお返事をいただけないでしょうか。

まず、ご足労ですが唸インターまでおかけください。もしも監禁されているのであれば、これは不可能ですので、いらっしゃらない時点で私の分析が絶妙にして正確であったということが証明されます。もしも唸インターまで来ていただけるのであれば、そこにある唸食堂のテーブル、北三列東四列目の席におすわりください。直ちに青年ウェイターが水を運び、注文を伺います。注文は唸定食を注文してください。この食堂で一番旨いと評判です。そして、五分以内にその唸定食がテーブルに届けられるでしょう。大きめの唸鯨の天ぷらを中心にその日の旬の野菜を揚げたものが皿からこぼれ落ちそうなほど大盛りです。しかも揚げ脂は新鮮な脂を使っており、その香ばしい香りを嗅ぐだけで口の中にあふれる唾液がついてテーブルの

上にこぼれ落ちるのです。注文の段階でライスまたはご飯を選択していらっしゃるはずなので、ライスが添えられているでしょう。それはご飯と言い換えてもよいほどのライスです。サラダは手をつけないでください。三日前に切り分けられ、冷蔵庫で冷凍されていたものです。プラスチックの模造品であるかもしれないのです。栄養価は一切ありません。

その喰定食を食べ終わったとき、箸をつけなかったサラダをかき分ければその底にカードが見つかるはずですが、何のカードなのかはそれを入手されているはずの次回、私の手紙の中で説明させていただきます。そして、そのカードと入れ替えに、お返事の紙片を隠していただければ幸いです。定食のトレイを下げに来るのはさきほどの青年ではなく、かなり年配の女性です。このようにしてそのお返事は確実に私の手許に届くでしょう。

また長くなってしまいました。便箋は先週大量に入手しており、十分に残りがあるのですが、そろそろ筆を置く時間がやってきたようです。勿論、筆といっても毛筆ではなく、万年筆ではあるのですが。

牛床 欠

十一月二十八日

拝啓 右足崎様

はっきりしたことがひとつあります。

右足崎様が監禁されており、その場所から外に出られないでいらっしゃるということです。前回のお手紙でお願いした方法では、右足崎様から私へお返事をいただくことができませんでした。喰インターに右足崎様がいらっしゃることはありませんでした。注文されなかった喰定食はすでに冷蔵庫の奥で半ば霜にまみれ凍りかけています。このような事態を想像しなかったわけではありませんが、いざ実際に現実と直面すると事の重大さに身の竦む思いです。

この事実は勿論、右足崎様が誰よりもよくご認識いただいていることであると理解いたしております。認識していてもその事態を解決できないというその点において、まさに監禁の恐ろしがあります。そしてこれは監禁という事態を超え、右足崎様と私の共通の問題についてもきわめて緊急事態だと言うことができます。

まだご説明させていただく機会のない、私の手紙の本来の目的は、このようにお返事のいただけないままではその説明は頓挫してしまい、右足崎様にとって非常に致命的な事態を引き起こすことでしょう。そしてそれはまた私にとってもあってはならない事態に陥ることに

なるのです。そのような事態だけは避けなくてはなりません。そのために私の払って来た努力を右足崎様はよくご存知ではありますが、それでも監禁されているという現状では、事態を解決するためのなんらかの行動によりご協力いただく事は不可能でありましょう。

そうであれば、私の起こすべき行動はただ一つしか残されておりません。幾度も検討を重ねた結果申し上げます。私牛床は右足崎様の監禁場所に向かい、右足崎様を救出しなくてはなりません。右足崎様が監禁され、監禁されているということは何らかの脅迫が行われているということではありますが、かくのごとく脅迫されていたとしても、私にはその脅迫について知る由もありません。それゆえ、私はその脅迫内容について官憲に連絡することはできず、それゆえ、一般的に脅迫時に必ずつけられるであろう条件であるはずの、警察に通報してはならないという警告を意図してであれ意図なくしてであれ、私が破ることはなく、右足崎様の身の安全は確保されています。そうであるからには、私が一人であったとしても右足崎様の救出に向かわなければ、おそらく身代金も払われることのない右足崎様は、監禁されたまま殺害される可能性さえなくはないのであります。両の手足を切断され、眉間を拳銃の弾丸に射抜かれた死体が発見されたというニュースはまだ報道されていませんから、右足崎様がまだご無事であると私は知っております。それゆえに、右足崎様の救出は一刻を争うものでありましょう。

この手紙を投函したその足で、私は救出に向かいます。あとしばらくの辛抱です。必ず救出いたします。

牛床 欠

その二

十一月二十三日

おじいちゃん、はじめまして。

はじめましてって、変かな。

だって、手紙なんて書くの初めてだもん。

おじいちゃんは今どこにいるのかな。心配だなあ。

夜はお家で眠るんだよ。

私は今日、内側駅に着いたんだ。

あんなに大きな駅があるなんて、びっくりしたよ。

おじいちゃんは来た事あるって言ってたね。あんなに大きいつて話してくれてたっけ。

電車で隣の席に座ってたおじさんが、内側駅は内側町の三倍の広さがあるんだって言ってたよ。

町より大きい駅なんてあるわけないと思って聞いてたけど、本当だったみたい。

改札を出たところにバス停があって、そこからバスに乗って駅の外に出るまで三十分もかかったんだよ。

バスを降りると目の前に大きな電車の車輪があって、ぐるぐる廻ってた。ビルの三階の窓に届くくらい大きくて、ぐるぐる廻ってたから近づくとき吸い込まれそうだったよ。もしかしたらあそこに吸い込まれて、まだ電車の中にいるのかもしれないね。

内側町は曲がり角に着くたびに改札口があって、改札口を通り抜けるために毎回切符が必要なんだ。お金がもうなくなりそうだよ。それで、歩き回るのはやめてホテルに入って、テレビを見てた。

ちょっと疲れちゃった。仕事は明日からにする。

おじいちゃんと一緒に来たかったな。

十一月二十五日

おじいちゃん、ちゃんとお飯食べてるかな。

私の晩ご飯は緑色であわあわのクリームみたいなやつ。なんていう名前なのかは分からないの。お店の人も「これです」としか言わなかった。

「コレ」っていう名前なのかな。味は、まあおいしかった。

今日のお仕事は一人だけ。最初の日だから少ないのかな。町の様子も分からなかったしね。

おじいちゃんるときはどうだったんだろう。聞いておけばよかったね。

優しいおじさんだったよ。おじいちゃんが優しい人はだめだって言ってたのは覚えてる。でも、朝から夕方まで一人も捕まえられなくて、仕方なかったんだ。

そのおじさんは、ホテルからレストランまでの曲がり角の改札のチケット代を全部払ってくれるって言うから、それで町外れにある小さなレストランまで行ったの。もう日が暮れかけ

てたし、今日は帰れないかなと思ったよ。最初の曲がり角で振り返るとホテルの壁の縁が赤く光ってたよ。見ると光る縁は直線からどんどんまるくなって、ねじれていったんだ。あれは月のせいなんだよっておじさんが指差しながら言ってた。なんでかは分からなかったけど、微笑んでおいたらおじさんはうれしそうだった。夜になると、町は別の町になってるのかもしれないね。

店の中は薄暗くて、他に客がいるのかどうかも分からなかった。一番奥の二人用のテーブルに案内されたよ。水色のクロスがかかってたけど、ピンクだったのかも。暗かったからはっきり分からなかったの。

食事をしている間、おじさんは私のことをじっと見つめるだけで何も言わなかった。お料理にも口をつけてなかったかも。おじいちゃんみたいでしょ。でもそのときはそんなこと思わなかった。帰るとき、ようやくおじいちゃんに似てたなって思った。

でも、仕事だから、私からいろいろ聞いたの。初恋の人のこととか、旅をしたことがあるのかとか、チョウチョのこととか、いろいろね。全部、メモにとったから、週末には全部送るね。そうだ、おじさんの背中の中の羽根のことは今書いた方がいいかも。

おじさんは生まれてから今まで、この町から出た事が無いんだって。大人はみんな、世界中を旅してるものだって思ってたから、その話を聞いてびっくりしたよ。だから、そう言ったの。そうしたら、おじさんは、自分の背中には七枚の羽根が生えていて、それが重くて町から出られないんだって言い訳をしたんだ。そんな羽根があるくらいで、旅ができないなんて信じられないでしょ。

おじさんも、信じられないって言ってた。ただ、その羽根は自分の思うようには動かさなくて、町を出ようとする羽根がひどくあばれて空を飛んで自分の家に戻されてしまうんだって。

空を飛べるんだねって聞いたら、そんなにいいもんじゃないよって言ってた。高くは飛ばないから、近くの家や壁や道路標識や柵や通行人や建物の壁にぶつかって、家に着く頃には体中に痣ができて、運が悪ければ腕や足の骨や体中の骨という骨がどれもめちゃくちゃに折れてしまうんだって。砕けてしまうって言ってたかな。

生まれたときから羽根があったのって聞いたら、生まれたときにはなかったんだって。もし、生まれたときから羽根が生えていたら、親は俺を道ばたに捨てていたのに違いないって、真剣な顔で言ってた。そんなバカなことないのにね。

それから、羽根を見たいかって聞かれて、うんって頷いたら、レストランの上の階の部屋をとってあるから、そこで見せようって言われて、ついていったの。

羽根はほんとに生えてた。危険だからって触らせてはくれなかったから、なんだか色紙をちぎってくっつけたみたいだなって思った。羽根だって言われても信じられなかったよ。少しも動いてなかったし。今は眠ってるからねっておじさんは嬉しそうに言ってたけど。

おじいちゃんは、背中に羽根なんてなかったよね。やっぱりおじいちゃんとは違うんだなあって思った。

長くなっちゃった。

また、明日、手紙書くね。

ばいばい。

十二月一日

おじいちゃん、元気かな。わたしは元気だよ。

どうしてかな。おじいちゃんから手紙が来ないから心配。わたしの手紙はちゃんと届いてる？

おじいちゃんって字書けなかったっけ。ふふふ。

あわてなくていいけど、お返事待ってるよ。

昨日の夜からずっと雨が降ってたらしいんだ。全然知らなかった。お昼すぎにホテルの外に出ると、上からたくさん水が落ちてきて、水浸しになっちゃった。近くのビルを見たら、壁がみんなぷっくり膨らんでるの。水を溜められる壁なんだって。

それで、道路はどこも水がたくさん溢れて、川になってた。曲がり角の改札も川の中に沈んで、誰もいなくなってるんだって。今日ならどこでもタダで行けたね。きっと。でも、外の川はすごく流れが早くて足を滑らせて溺れるからどこにも行かなかったの。

どこにも行けなくて、今日は一日中ホテルのロビーにいたんだ。今日のお客は二人。雨だからしかたないよね。

一人目は若い男の人で、まあ、わたしよりは年上だけど、ロビーで話をしたの。彼はコーヒー、私はイチゴミルクを飲みながら、初恋の話とか、幽霊の話とか、水に溶ける生き物のこととか、壁の話もしたかな。いろんな話を聞いたらお兄ちゃんって呼んでもいいかなって思った。お兄ちゃんもそう呼ばれるのが好きだったみたい。

突然、お兄ちゃんが目の前に右手を突き出して、手のひらをゆらゆらさせ始めたから、どうしたのって聞いたんだよ。そしたら、ふふって笑いながら、この右手の手のひらは前世は蝶だったんだって教えてくれた。今でも、空を飛ぶ夢を見て目が覚めると、右手が手首から離れて空中を浮遊するんだって。「ふゆう」って意味が分からなかったけど、空を飛ぶことだって言ってた。

夢の中から蝶が集めてきた花の蜜で、部屋の中はいい香りでいっぱいになるんだって。そして、蝶の鱗粉にその香りが染み込むと、その鱗粉を吸い込んだ生き物はみんな蝶の言いなりになるんだって。話を聞いてると、本当に甘くてつんとするようないいにおりが漂ってきて、お兄ちゃんにぎゅって抱きしめてほしくなっちゃった。

あの時、お兄ちゃんは夢を見てたのかな。だって、チョウチョウは夢の中で飛ぶっていう話だったし、わたしを抱いていた腕がほどけると、目の前にいたはずのお兄ちゃんの姿はどこにもいなくなってたんだ。

お兄ちゃんが蝶だったのかな。蝶は他の生き物に何をさせたかったんだろう。

お兄ちゃんがどこにいったのかなって見回していたら、どうしたんですかって、知らないおじさんが話しかけて来たの。おじさんは、ずっとわたしのことを見てたんだって。お兄ちゃんのことを聞いたけど、他には誰もいなかったよって言ってた。どうしてお兄ちゃんはいなかったんだろう。

それから、おじさんと話をしたの。おじさんは、すごくわたしと話をしたかったらしいよ。わたしがホテルに来た最初の日からずっと気にしてたって言ってた。

おじさんは、ずっと南の方から来たんだ。内側町にたどり着くまで半年もかかったんだって。船やバスや電車を乗り継いで来たんだって言ってた。「ふね」って何の事だろう。おじさんはひどく早口で話すから、何も質問できなかった。たくさん話をしてくれたけど、もうあんまり覚えてないの。世界のすべての無人島を旅したけど本当の無人島はどこにもなかったとか、世界一高い塔のてっぺんに月のお姫様への恋文を置いて来たとか、どこか遠い国の市場にはあらゆるものが揃っていてそこで自分自身を見つけたからもう死ぬ事は無いんだとか、よくわかんなかったし、それくらいしか覚えてないや。

覚えてないのは眠っていたからかも。気がついたらおじさんがわたしを抱えて階段を上つてるところだった。どこに行くのって聞いたら、知らなくていいって言われたの。おじさんの胸から覚えのあるにおいがして、なんだろうなって思ったら、藁のにおいだって分かったよ。小さい頃、屋根裏の藁に潜り込んで遊んでた、あのときのにおい。おじさんは藁で作った人形だったのかなあ。階段の上の廊下で、おじさんの腕を抜け出して自分の部屋に戻ったから、おじさんが藁だったかどうかは分からなかった。

人形は嘘をつくから近づいちゃいけないって、おじいちゃんが言ってたのを思い出したんだ。だっこされてしまったけど、これくらいならいいよね。

「ふね」って何のことなんだろう。結局おじさんは教えてくれなかったから、おじさんも乗っ

たことがなかったのかもしれないね。おじいちゃんは知ってるかな。知ってたら、今度手紙で教えてね。

ばいばい

十二月七日

おじいちゃん、元気かな。わたしは元気だよ。

おじいちゃんの手紙こないね。

指にケガしちゃったかな。ドアに挟んだのかも。ヤケドしたのかもしれないね。

無理なくていいよ。もうすぐ帰れると思う。

藁の人形のおじさんは、昔、牢屋に入ってたんだって。ちいさい女の子のおしりや胸にいたずらして、おしっこをかけて捨てるんだって。そんなのいやだよ。大嫌い。

教えてくれたのは監視の人。牢屋に入ってた人は牢屋を出てもずっと監視の人がついてて、同じ事をしないように見張ってるらしいの。前の手紙を書いた次の日に、その人が、教えてくれたんだ。

おじいちゃんは監視の人って見たことあるかな。目が大きくて顔からはみ出してるの。大きめのメガネかけてるみたいだった。レンズの上に目の絵が貼ってあるやつ。監視の人はみんな目が大きいって聞いたらうなづいてた。うなづいてたんじゃなくて、目が重くて頭が下がってただけなのかも。

昨日のおじさんは、あれからまた逮捕されて牢屋に入れられたんだって。途中で帰って来てよかった。おしっこかけられなくてよかった。やっぱり藁人形だからそんなことをするのか。おじいちゃんはそんなことしなかったよね。

監視の人は監視する相手が牢屋に入れられたから、一週間くらい休暇がもらえたって言ってた。どんな人を監視してきたのって聞いたけど、それは教えられないって断られてしまったの。それで、初恋のことを聞いたよ。びっくりしてた。そんなこと聞かれたの初めてだって。それでも少し話してくれた。

初恋の相手は運動選手で、空を飛ぶ競技をしてたんだって。空中に浮かんでいる時間を競うらしいの。そんなの聞いた事ないよね。でも、監視の人の故郷にはそういうのがあったんだって。

空に浮いているためには身体を軽くしなくちゃいけないの。わたしもそう思った。それで、初恋の人は何も食べなくなって、半年くらい何も食べなかったら、皮の外から骨の形がはっき

り見えるようになったんだって。それじゃあ空にとびあがる力もなくなりそう。それでも足りなくて骨の重さを減らすために、腕や足の骨を半分くらい切り取ってしまったり、あばら骨も全部抜いてしまったりしてたらしいよ。それから、頭蓋骨や顔の内側の骨も全部とりはずして、最後は、何か見た事のないぐねぐねした生き物に変わってしまったんだって。それで監視の人の初恋は終わったんだって言ってた。

そんなにして世界記録は出たのかな。監視の人に聞いても分からないって言ってた。作り話だったのかもしれないね。

それから、時間の種が三日前に盗まれたこととか、今まで百人以上監視してきたけど本当は全部同じひとで、本当は自分が監視されていたんじゃないとか、自分の腸は手術で半分しかなくなっていて、消化途中の食物は近くにいる他の人の腸に移動するんだとか、聞いてて気分が悪くなっちゃった。

話は全部まとめて週末に送るね。楽しみにしててほしいな。

今日はこれだけなの。ごめんね。

おじいちゃんのお返事待ってるからね。

ばいばい

十二月二十九日

おじいちゃん、ごめんね。

わたし、逮捕されちゃった。

今週の思い出も取られちゃった。

泣きたい。

ケガとか乱暴なことはされてないから安心してね。

でも、寒いんだ。壁がなく鉄の棒が立ってるだけ。風が吹き抜けてくの。

寒くてたまらないの。暖房ないんだもん。

どうしてこんなことになったのか分からないよ。あの監視のおじさんのせいかな。

あのおじさんはわたしを監視してたのかな。嘘ついてたのかな。

あのおじさんの思い出は本当のことじゃなかったのかもしれないね。

そんな話をおじいちゃんに送ってしまったこと、ごめんね。

おじいちゃんにはいけないことしちゃったけど、他の人には何もしてないのにな。

何も悪い事してないのにどうして逮捕されたんだろう。

逮捕した人もこの牢屋の人も誰も教えてくれないよ。
牢屋の監視の人は、何を聞いても答えてくれないの。言葉が話せないみたい。
顔もずっとこわばらせたまま。耳も聞こえないのかも。
新しい思い出を聞きたいよ。身体の中がからっぽになりそう。
おじいちゃんにもずっと思い出を送れないの。悲しい。

これを送ったら、便箋もペンも取り上げられるんだ。
もうおじいちゃんに手紙書けないよ。さびしい。

おじいちゃんからお返事こなかったね。
どうしてかな。
おじいちゃんどうしてるのかな。
心配だよ。

帰りたい。
おじいちゃんに会いたいよ。

その三

十二月三十一日

班長殿

わたくしです。時鹿 薬です。
定時報告です。
本日の担当分はすべて終わりました。

回収七件、配達三十二件です。
回収七件の内二件では指定の場所に差出人の姿が見えず探し出すために二時間三十分を要しました。一件では差出人の住所が、他の一件では氏名が間違っていたためです。一字も合っていないませんでしたし、発音も似てはいませんでした。今後の受付業務での改善を希望いたします。

翻って配達三十二件につきましては、そのような間違いはありませんでしたが、一件で宛先住所に受取人が不在でありかつ書留配達物でしたので不在者票を残して次の配達に向かいましたところ、三時間後に近くの宛先への配達があったので不在者票を確認のため再来いたしました。確認された様子はありませんでした。

この配達不可能郵便物は、再度回収し最寄りのポストに投函いたしましたので、後日の再配達の処理をお願いいたします。

本日の作業は以上の通りです。

時鹿薬

一月二日

班長殿。

時鹿薬です。

本日の報告を行います。

本日は回収三件、配達二十件でした。

回収三件のうち一件は、配達移動中に呼び止められ配達依頼を受け付けました。受付伝票は所定の封筒に入れ、送付済みです。事務処理をお願いいたします。

依頼された配達郵便物は私の区間でしたので、そのまま配達に向かいました。

配達二十件のうち一件はこの郵便物であります。

残り十九件のうち二件は宛先住所が存在しませんでした。一件の宛先は「内側町海辺三の二の三」もう一件の宛先は「内側内町内部二四の一の三」でした。郵便区局の住所データベースの確認をお願いいたします。

私が直接受け付けました郵便物については、宛先の家屋に居住者の気配はありませんでしたが、郵便受けは機能しておりましたので、投函いたしました。

本日最後の配達郵便物の宛先住所は、私の受け持ち区画の最も外側であったため、該当住所に到着したのは日付の変わった一月三日になっていました。

作業はすべて完了しましたが、一月三日の作業については十分ご配慮いただけますようお願いいたします。

一月三日

尻凹班長殿

時鹿薬です。

本日の報告を行います。

本日は回収五件、配達十五件でした。

ここ数日回収件数、配達件数共に減少の傾向がありますが、これは年始の区画再調整により配達区が拡大し、一日に処理できる件数に限界があると配達管理部門が判断したからだと考えられます。私は職業配達係であり、区画が拡大されることに異議を挟むものではありませんが、作業件数の減少には改善を求めます。おそらくこの倍の件数であっても処理可能であります。年頭にあたり、私の労働意欲はいやまし担当区画の地理も熟知しており、管理部門が限界を超えたと考える以上の仕事を処理することをお約束いたします。

業務報告です。

回収五件のうち一件は先日と同様に移動中に合図を受け、その場で依頼を受けたものです。配達先の住所に宛名の人物が存在するかどうか危ぶまれたので、配達不可能の場合は差出人に返却するという約束をしてはどうかと考えましたが、よく考えてみればこの差出人の住所も存在するのかどうか確認できないので、配達不能の場合はこの場所、受け取ったと同じ場所にて返却するという約束をいたしました。依頼者は不審な表情を浮かべ、そんなことがあるのかとか、そんなことができるのかといった疑問をつぶやいていました。もしかすると苦情が局に送られるかもしれません。このような事情ですのでご配慮お願いします。

配達十五件の内一件は、上記の郵便物です。残り十四件の内四件の配達先が存在しませんでした。一件の宛先は「内側町左内側二の三」一件の宛先は「内側町上内部三の一」一件の宛先は「内内側町先の指五の二」および「内側町痣三の十二」でした。このような住所が存在しないことは、常識で考えても分かりそうなものです。郵便区局の住所データベースを確認し、管理部門での非在住所の検出による配達業務の迅速化を是非進めていただきたい。

以上

午後になって、そのホテルから三つ改札を通った交差点で、ある男から配達を依頼されました。封書です。男は声を出さなかったので、配達依頼だとしばらく気づきませんでした。声だけでなく、灰色の上下に濃い灰色の帽子を深くかぶり、これも灰色のマスクをしており、背後の建物もまた灰色に塗装されていたために、識別し難くなっていたことも気づかなかった原因でありましょう。偶然にそのような服装をしていたのでしょうか。あるいは、私が気づかずに通り過ぎ、それを業務怠慢であると告発するために、わざとそのような服装をしていたのではないのでしょうか。どちらなのかは分かりません。

顔は判別できませんでした。マスクで隠していたので仕方のないことです。とはいえ、配達依頼許可証を見せられたので、業務は手順通りに進めるしかありませんでした。宛先は、内側町としか書かれておらず宛先の名前は「右足崎崩」でした。この名前が、本日の非存人物名一覧に記載されていることは、その場で確認いたしました。三度確認しております。それから、わたくしは注意深く差出人を確認したのです。差出人は書かれていませんでした。確かに規約の上では差出人を記載する義務はありませんが、差出人の名前がないのではこの封書はどこにも届けられないでしょう。わたくしは改めてこの男の姿を見ました。そして、この目の前にいる人物には名前がなく、つまり存在してはいないのだという事実には驚きました。宛先の人物が存在しない以上、配達業務規約条項に従い、こんなことをお尋ねするのは業務上の義務だからなのですがと前置きをして、わたくしは質問しました。

「この封書の配達先は、極めて危険な場所であるかまたは配達者の命にかかわる人物である可能性が高いという通達を受けています。その危険が解消された後、それは二日後になるか二年後になるか、あるいは永遠に訪れないのかもしれないのですが、その時に配達するということを承知していただくことはできるでしょうか」

規則通りの質問でしたが、男はそのような質問を予想していなかったのでしょうか、わたくしを見つめる眼球を細かく震わせ周囲に視線をさ迷わせ、二度とわたくしとは目を合わせないまま、それは困ると言いました。重要な会話と判断できたので、わたくしはその対話を録音しております。以下、そのやりとりを記載します。

「二時間以内に届けてもらわなくてはなりません」

「それはむずかしい。宛先が内側町としか書かれていない以上、内側町全域の宛先を調べる必要があり、それには最低二日はかかるでしょう。万が一、最初に調べた住所がその場所であるというような僥倖を除けば、二時間以内の配達是不可能です」

「不可能という概念は個人的な誤謬に他なりません。不可能であるならばそれは可能でもあるのです。それが論理というものです」

「意味がよくわかりません。配達係は、二時間以内に配達しなくてはならないという義務を免除されています」

すると男は、相手がこれほど無知だとは思わなかった、そんな義務はひとつもないのだが、ここはひとつ同情もこめて、仕方がない自分が教えてやるとでもいうように、空を見ながらこう話しました。繰り返しますが、二度とわたくしを見ることはなかったのであります。「私の予想では、右足崎氏は誘拐事件に巻き込まれている可能性が高いのです。しかも、それを警察に通報することは、通常そうであるように、右足崎氏の命に関わるのでできません。こんなことを配達係であるあなたに話すのも危険なのですがそうなのです。右足崎氏を救出するために、この手紙を届けていただかなくてはなりません。人の命より重要なものがあるでしょうか」

班長殿もお気づきのよう、それは緊急事態に関する規則第二十二項の適用範囲です。私は手のひらを牛床氏に向けそれ以上話す必要はないと示しました。二十二項の「み」に従い、誰かが聞いていて警察に通報するかもしれない危険を回避するためです。それでもわたくしは男が真実を話しているという確信が持てませんでした。わたくしは確認しました。

「書留にする必要はありますか」

男はしばらく考え込むように動きを止め、それから手近の壁から生えていた虹を指にからめとりながら答えました。

「書留をお願いします」

録音はここまでです。わたくしには、この依頼を拒絶する理由がありませんでした。受け取った封筒をカバンの依頼ポケットにしまい、わたくしは配達に向かいました。

先に「僥倖」という言葉を使いました。失礼ですが、班長はその意味をお分かりでしょうか。わたくしは、目的の住所に最初からたどり着くなど不可能だという意味で使いました。もしも十二軒目でたどり着いた場合、それは不可能と可能の中間のどこかです。それは「僥倖」なのでしょう。そうなのかもしれないと思うのです。なぜなら、わたくしは正確に十二軒目でその宛先にたどり着いたからです。勿論、わたくしの勘違いかもしれませぬ。しかし、少なくとも、その封筒を手渡した相手が宛先の人物であると、わたくしは確信しています。勿論、書留ですので、サインされた受取証もここに保持しております。

これは予想されたことですが、非在人物として登録されている右足崎氏のサインは「右足崎崩」ではなく「苦馬溶」でした。少なくとも書かれた文字は「苦馬溶」としか読めませんでした。「右足崎」もしくは「苦馬」というその人物は、もう何年も使用されていない倉庫の片隅に置かれた椅子に座り、その椅子に身体を縄で縛り付けられていました。ということは座っていたのではなく、座らされていたというべきかもしれません。倉庫の床には梱包に使われたのだろう木や金属の破片が散らばり、それだけではなく、女性のものと思われる衣類であるとか、これも汚れていて判読が難しいながら卑猥なポーズをした人物の写真であることが分か

る写真を乱暴に引きちぎられ、濡れて頁を開くこともできなくなっている雑誌などが散らばり、肉や野菜の腐ったにおいがしていました。その状況からみて、その人物が被誘拐者であり、まぎれもなく右足崎氏であると、わたくしは判断したのです。

見張りは建物の周囲に立っていましたが、配達係であるわたくしには配達係であるからでしょうか、まったく注意を払いませんでした。右足崎という人物がここにいるかと問うと、奥にいと答えてさくれたのです。

封筒を渡すために、わたくしは被誘拐者の縄を解き、強ばった足や腕の筋肉を軽くほぐしました。なにしろ受取証にサインを書いてもらう必要があったからです。被誘拐者は立ち上がるとぼんやりとわたくしを見つめ、呆然と封筒を受け取り、漠然と受取証にサインをしたのです。それが「苦馬溶」でした。

「右足崎崩様でしょうか」

そう尋ねると、「苦馬溶」と書いた男はゆっくりと頷きました。なるほど、非在者でありまた被誘拐者であればそういうこともあるでしょう。わたくしは、受取証をカバンの受取証ポケットに大切にしまうと、再び被誘拐者を椅子に座らせ、縄でしばりあげました。配達の後はその場所を元の状態に戻さなくてはならないからです。

わたくしは配達の依頼人に受取証の控えを渡すために、道に戻りました。勿論、差出人に名前がない以上、そのような必要はないのですが、配達係としての使命がそのような行動を取らせたのです。

その四

二月十一日

拝啓

数字で呼ばれています。一桁であったり十桁以上であったり、その数字は日によって違いますが、その数字が私のことを意味しているのは分かります。最初の頃は呼び方で分かるかと思っていましたが、やがてそうではないと思うようになりました。というのも、もしも呼び方で意味が変わるのだとすれば、私という存在は呼ぶ誰かの気分次第で変わってしまうということになるからです。勿論、そうなのかもしれませんし、そうでないのかもしれません。しばらく考えた後で、その数字の間に何か規則があるのではないかと思いつきました。最初

から今までに呼ばれた数字をすべて覚えているわけではないので、その規則がこうだと断定することはできません。それでも、もう少し時間が経てば規則のおおまかな仕組みが分かって来るような気はします。

部屋は床も壁も天井も白く塗装されています。照明が反射してまぶしくて、本当にそれが白だと断言するのは躊躇してしまいます。家具は机と椅子があるだけですが、それもおそらく真っ白です。机の上には紙とペンが揃えて置かれています。ペンを使い、ノートを文字で埋め、そのままにして眠っても、目が覚めるといつもと同じ位置に揃えられています。そうそう、初めてペンを使った時、インクも白なのではないかと思ったものです。それで、ペン先から黒い文字が染み出してきた時には、ひどく安心したように思います。後になって気がついたのですが、部屋がこれほど白いのは、他にもないこの文字の黒さを際立たせるためだったのかもしれませんが。黒い文字を見るのが楽しくて私は毎日紙に何かを書きました。何を書いたのかは覚えていません。私の書いた紙は、眠っている間にどこかに持ち運ばれてしまうので、読み直す事などできないのです。

部屋には私一人が住んでいて、外には出られないようです。閉じ込められているのかもしれませんが。それほど不自由は感じないので、誰かに閉じ込められているという切羽詰まった印象はありません。そもそもこの部屋には扉がないのです。机と椅子しかない部屋では、どちらを向いても目にとまるのは壁だけです。その壁のどこにも扉はありませんでした。白く塗られているために扉と壁の境界が分からなくなっているのではないかと、壁の隅から隅まで指を這わせ確かめてみたのですが、扉はどこにもありませんでした。指よりも舌のほうが敏感なのだから、舌で舐めて確かめるべきだったかと今では思っています。舌なら分かったかもしれませんが。壁だけでなく床も調べました。腹這いになって丹念に調べましたがやはり扉はありませんでした。机の上に登って天井もさぐろうとしましたが、天井は高くて手が届きませんでした。だとすれば、あの天井に扉があるのかもれません。それは確かめられませんでした。

瓶の中の小さな模型の船を見た事があります。部屋に扉がないことに気づいたとき、私は最初にそれを思い出しました。私は船の模型なののでしょうか。私は船ではないので、人の形をした模型なのかもしれません。ただ、そうではないような気がします。自分が模型だとしたら、自分が模型だとは思わないのではないのでしょうか。とはいえそうでないとも言いきれないのです。自分が模型であるかないかなど、これまで一度も考えた事はありませんでしたから。

それからは幾度も、もしも私が模型の船だったとしたらと想像しました。もしもそうなら、わたしは自分自身の姿を瓶の外側から見たと記憶しているのでしょうか。そうも考えました。でも、こうして真っ白い部屋の中でただ一つのペンをくねらせ黒いインクで文字を書いていると、もしかすると、瓶の外から見ていた模型の船の姿は、瓶のガラスに反射した自分自

身の姿だったのかもしれないとも思えてきました。しかしこの真っ白い部屋にはガラスもなければ鏡もありません。私が模型の船だったことがあったとしても、それはずいぶん昔のことのようです。

ときどき、机の上の白紙に小さな染みがあります。何かの模様なのかもしれません。染みをよく見ると、大きく開いた花びらであったり、空を飛翔する空想上の生物であったり、引き裂かれた誰かの腹であったり、大きな回路図の一部であることが分かります。おそらく見た目通りのものではないのでしょう。この部屋には花は咲いていませんし、空想も存在せず、引き裂かれていない腹しかなく、回路などどこにも見つかりませんでした。勿論、染みはこの部屋に存在しない物の形を描いているのかもしれません。とはいえ、この部屋に存在しないものごとを想像するのは難しい。

部屋の外に何があるのだろうかと思う事もあります。この部屋に来る前のことを覚えていますが、あの世界がこの部屋の外にあるのでしょうか。海と呼ばれる大量の水とその上で形を変え続ける波であるとか、遙か彼方にあり決してたどり着くことのできない七色に輝く山と呼ばれる岩の塊とそれを隠すための雲という形の定まらない遮蔽物であるとか、どれだけ手紙を送っても連絡のつかない誰かであるとか、表面が滑らかに磨き上げられ一瞬といえども停止することの許されない高速道路であるとか、存在するものについて語ってはならない物語を永遠に話し続ける機械であるとか、その他のあらゆるものはこの部屋の中にいる限り存在するとは思えませんし、存在しないという確信があります。そういったことを考慮すれば、部屋の外にはやはり真っ白に塗られた廊下があり、その廊下にはこの部屋と同じ部屋の入り口がずっと並んでいるのでしょう。勿論、そんな馬鹿なこともありえません。そのような無限に続く廊下が可能なものかどうか、私は一度図面を描いてみました。どれだけ工夫を重ねても、そんな幾何学はありませんでした。そもそも世界に無限などというものは存在しないのですから。そこで無限に似た何かではないのだろうかと言説を立ててみたのですが、すぐに気づきました。無限こそが現実の比喩であるということに。

だからどうということはないのです。そもそもこの部屋には時計ひとつなく、この部屋に来る以前のことと言っても、それをどう考えればよいのかが分かりません。この部屋にあるのは、眠っていると起きているという二つの状態だけで、それを私は繰り返しています。あるいは、繰り返していると思っ込んでいるだけなのかもしれません。そういえば、数字と呼ばれていると思ってましたが、あれは数字ではなかったのかもしれない。というのも、私に割り当てられた数字は、一度も足したり引いたり掛けたり割ったりということがなく、一度使われたら二度と使われないからです。あるいは何度か使われることもあるのかもしれませんが、同じ数字であるかどうかを確かめる方法はありませんでした。そして、あの白い紙の表面にあった染みは、いろいろなものに見えるただの染みではなく、そう見えていたいろいろなものそれ自体だったのかもしれない。それが白紙の上に形作られた場合、それはそれ自体

ではありえないので、気づかなかっただけなのでしょう。

いや、そんなバカなことがあるわけがない。おそらく、たぶん、認め難いことだけれども、あの染みは、あの染みこそが文字だったのではないのでしょうか。私は自分の書いたものをまだ見たことがないので、文字というものがどう見えるのかは知りません。だから、文字というものが染みのように見えるとしてもあながち間違っているとは思えないのです。そうでないとしたら、いったい文字はどう見えるというのでしょうか。他にどのように見えるというのでしょうか。いや、どう見えてもいいのです。あの染みが文字であるにしろ文字でないにしろ、この部屋にはあの黒い染みしか存在してはいません。それ以外はすべて真っ白な場所です。そもそも、世界に存在するものは文字だけなのですから、あれが文字でないわけがないのです。もしも、文字ではない染みというものが存在するとしたら、私はそれを認識することなどできないはずです。意味のともなわない形というものを誰が見分けられるでしょう。

またわたしを呼ぶ声が聞こえます。数字でしょうか。数字に似せた別の何かでしょうか。数字とは似てもいない何かでしょうか。わたしはきっと